

# 宗派的多様性とその外部

池田昭光

筆者の専門である文化人類学は、異なる社会や文化の人びとと日常生活をともにしながら、人文・社会科学的テーマを、他の学問とは少し異なる切り口から考えていくところに特徴がある。筆者は大学在学中から中東地域に興味をもち、文化人類学に加えてアラビア語やイスラームについても勉強していた。大学院博士課程進学後はレバノン共和国という中東の小国に赴き、合計3年ほどの現地滞在を行いながら調査・研究を行ってきた。

レバノンという国に最初から思い入れがあったわけではない。同国は「イスラーム文化圏」のイメージの強い中東のなかでもキリスト教徒の割合がもっとも高く、また、马龙派、ギリシア正教、アルメニア・カトリックなどの様々な宗派に分かれており、宗教・文化的な多様性の高さは文化人類学的に言って興味深い。また、1970年代から15年にわたる内戦を経験するなど、現代史のうえでも大きな出来事を経験してきている。だが、同国への予備調査を通じて筆者が感じたのは「特徴のつかみづらさ」であった。

もっと特徴のはっきりした地域を選べばよかったのでは、とも思われたが、そうした地域（たとえば、エジプト、モロッコ、イエメンなど）はすでに国内外の研究者による先行研究が積み重ねられてきている。大学院生の気負いもあったのか、結果として「手垢」のついていないレバノンを選んだのである。

しかし、現地の田舎で小都市に暮らしながら本格的な調査を始めると、「特徴のつかみづらさ」に苦しめられる毎日だった。筆者の選んだ小都市は、イスラーム教徒（スンナ派）のほかに马龙派、ギリシア正教、ギリシア・カトリック、プロテスタントが混在して暮らしており、「レバノンの縮図」とも言える特徴的な都市であった（こうした場所は実はそれほど多くない）。その特徴を研究上の戦略としておおいに活用すればよかったのかもしれないが、筆者はむしろ、日々の生活のなかで、身体的・感覚的に現前する「特徴のつかみづらさ」が気になって仕方がなかった。しかし、それをどう表現したらよいのか、それすらもつかめず、鬱々としてしまうことも多かった。

優れた研究者ならば、あるきっかけを通じて研究上のブレイクスルーを経験するのかもしれないが、残念ながらそうした契機には恵まれなかった。しかし、いくつかのきっかけをもとに、日本の友人たちを前に、現地経験を表現することができた。それらのきっかけとは、ほんの些細なものである。お年寄りがシャッターを閉めたこと。古着を取りにくるよう、住民に求められたので取りに行くも、結果として古着が手に入らなかったこと。

そんなことが研究になるのかと訝しがる向きもあろう。しかし、筆者が結局のところ博士論文とその書籍版『流れをよそおう』（春風社、2018）で展開したのは、こうしたきわめて地味で些細な出来事を、前述のような、レバノンの特徴である宗教文化的多様性と結びつけて論じることであった。さらにいえば、むしろ地味で些細な出来事に見られる行動様式が、一見すると人目を引くような宗教文化的多様性を包み込んで存在しているのではないかという問題提起である。

博士論文や拙著でおこなった議論は、今から振り返れば不十分な点がいくつも目についてしまう。

しかし、ぱっとしない日常を前に悩む日々が、結果として文化を見る視点を筆者にさずけてくれたのも確かだと感じている。授業でテキストや映画を扱っても、学生たちがなぜか目をそらしてしまう一文やワンシーンに、今なら筆者は自然に目を向けることができ、そこからテキストの勘所を導き出すことも行えている（と思っている）。

教育にも応用可能な視点を養えたことが、これまでの研究成果のいちばん大きなことではなかったかと思う次第である。

研究所概要

月例研究報告

新所員研究概要

ランゲージラウンジ活動報告

語学検定講座報告

研究プロジェクト

研究業績